

原著

障害をもつ中学3年生の海外派遣体験による変化と同行者の連携

渋谷洋子¹ 藤井清美² 川上あずさ¹¹奈良県立医科大学, ²姫路大学

Changes brought by international student visiting experience in third-grade junior high school students with disabilities and chaperone cooperation

Yoko Shibuya¹, Kiyomi Fujii², Azusa Kawakami¹Nara Medical University¹, Himeji University²

要旨

本研究は、障害のある中学3年生の海外派遣による変化とその事業の同行者の連携に対する考えを明らかにすることを目的として、達成動機質問紙調査、バウムテスト、面接調査を実施した。対象者は、生徒8名と同行者7名であった。生徒の変化としては、自己充実達成動機では上昇、競争的達成動機では低下という傾向であり、自我の変化も確認できた。同行者の連携に関しては、情報の共有や他職種の専門性の尊重に加え、同行者の調和が必要という考えも確認できた。さらに、イレギュラーな事態への備えが必要という考えも認められた。生徒の変化には、同行者がとらえた生徒の自立や自信、また他の生徒と自身の比較、メンバーとの関係形成や新たな環境での刺激が影響していると考えられた。生徒にとって、保護者と離れ海外という異文化で過ごす経験は、短期間であっても達成動機や自我の変化につながるほどの貴重な体験であった。また、その際の連携には、他職種の専門性の尊重や調和が基盤となると考えられた。

The present study aimed to clarify the changes brought by participation in an international student visit program in third-grade junior high school students with disabilities and the views of program chaperones regarding cooperation. An achievement motivation questionnaire, the Baum test, and interviews were conducted on eight third-grade junior high school students with disabilities and seven chaperones. Changes in ego and tendencies toward increased self-fulfillment achievement motivation and decreased competitive achievement motivation were observed in students. With regard to chaperone cooperation, views included the need for unity among chaperones as well as information sharing and respect for the expertise of other professions. The need to be prepared for unexpected situations was also expressed. Student changes were influenced by chaperone perceptions of student independence and confidence, comparison of self to other students, and by formation of relationships with other group members as well as finding stimulation from a new environment. For students, the experience of leaving their parents and spending time in a different culture overseas was of considerable value, generating changes in achievement motivation and ego within a short time. Chaperone cooperation during such trips is based on unity among and respect for the expertise of other professions.

I. はじめに

障害があることにより、通常の学級における指導ではもっている能力を十分に伸ばすことができない子どもたちは、特別支援学校や特別支援学級に在籍し、子ども一人一人の教育的ニーズに基づき、持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するための支援を受けている。平成 26 年5月1日現在で特別支援学校中学部には約3万人、特別支援学級には約 5.8 万人の子どもが在籍している(文部科学省、2017)。特別支援教育は、幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立つ(文部科学省、2017)とされ、各学校の教育目的は、子どもの障害の区分により変化するが、子どもたちの体験や人と人とのかかわりが重要視されていると捉えることができる。

A 市は、障害を持つ生徒が海外での体験を通じ、国際的視野と社会体験を広めることを目的とし平成4年から、障害のある生徒を海外に派遣する事業を実施してきた。中学生の海外派遣については、国際交流事業として国際性豊かな青少年の育成や語学教育を目的として実施されているが、障害のある中学生の海外派遣は見当たらない。また、筆者らは先行研究として、保護者が捉えた障害のある子どもの海外派遣の有用性について(川上ら、2008)報告しているが、子ども自身による評価については検討できていない。

そこで今回、特別支援学校および特別支援学級に在籍している中学3年生の海外派遣体験による変化とその事業に参加する同行者の連携について検討したいと考えた。

研究目的:

1. 障害をもつ中学3年生の海外派遣による変化を、主観的客観的評価から明らかにする。
2. 海外派遣に同行したスタッフの体験から、円滑な多職種連携についての示唆を得る。

II. 研究方法

1. 研究対象:A 市障害者海外派遣事業に参

加した中学3年生および同事業に事前研修から参加した同行者 7 名(中学校教諭 3 名、医師 1 名、教育委員会及び事務系職員 3 名)。

2. 研究方法

1) 子どもの達成動機測定尺度(森ら、1997)とバウムテストを海外派遣前後3週間目で比較する。使用した子どもの達成動機測定尺度については、対象となる中学生の WISC-III (FIQ) の評価が 46~77(60~70 代が5名)であったため小学校 3~6 年生が適応年齢のものを使用した。子どもの達成動機尺度については、平均値を比較する。なお達成動機は、自己充實的達成動機と競争的達成動機の2種からなる。自己充實的達成動機は、他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機であり、競争的達成動機は、他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機とされる。

バウムテストの幹の太さは、自我の強さを表すと言われており、樹冠と幹の高さの比率から、発達の側面が表されると言われている代表的な項目を比較する。

- 2) 同行者に対する面接調査。

調査時期は、派遣後 1 か月である。

面接内容は、参加中の出来事と生徒の反応、および同行者の連携の実際と連携に対する考え、とした。面接データについては、逐語録を作成し類似性に注目して、カテゴリ化した。

- 3) 研究期間:

平成 28 年1月~3 月

III. 倫理的配慮

兵庫大学研究倫理委員会の承認を得て実施し、研究の不参加によって海外派遣への影響や不利益は受けないこと等を口頭と文書を用いて十分に説明し、生徒・保護者、同行者、関係機関から同行者から同意書を得た。

IV. 生徒が体験した海外派遣事業のプログラム

この海外派遣事業は、障害を持つ生徒が海外での体験を通じ、国際的視野と社会体験を広めることを目的としている。対象は、A 市内中学校の特別支援学級、公立各特別支援学校の中学3年生であり、障害は特定せず、希望者の中から選抜される。同行者は、参加する中学生と同数の多職種者から構成され、保護者は同行しない。

プログラムは、事前研修、海外派遣、事後研修で構成される。プログラムについて、表1に示す。

表1. 第24回障がい者海外派遣プログラム

日程	内容
派遣2ヶ月前	事前研修Ⅰ
派遣7週間前	事前研修Ⅱ
派遣3週間前	事前研修Ⅲ 宿泊研修
派遣1日前	事前研修Ⅳ 結団式・壮行会
派遣当日	海外派遣 ニュージーランドへ出発
1日目	オークランド市役所 表敬訪問 ケリー・タールトン水族館見学
2日目	乗馬体験(ヘンダーソンポニークラブ) サポータードライブ訪問(作業所) 日本庭園見学 買い物体験 スーパーマーケット
3日目	グリーンベイ・ハイスクール訪問 (特別支援学級) フードコートで昼食、買い物 スカイタワー見学 セーリングクルーズ体験
4日目	オークランド博物館見学 伝統料理ハンギディナー
5日目	シーブショー見学(アグロドーム) 間欠泉・マオリ村見学 ロトルア観光
6日目	ワイトモ鍾乳洞にてツチボタル鑑賞
7日目	オークランド国際空港出発
派遣1ヵ月後	事後研修

V. 結果

本事業の全プログラムに参加した中学3年生(以下生徒とする)は、8名で、生徒の障害は、発達障害(6)、知的障害(1)、感音性難聴(1)であった。達成動機尺度は、欠損値のない7名分を対象とした。同行者の職種は、中学校教諭、医師、看護師、事務系職員であり、面接は、看護師を除く7名に実施した。面接時間は、9～33分、平均19分であった。

1. 生徒の変化

質問紙とバウムテストの結果および同行者がとらえた生徒の変化については、表(2-3)に示す。バウムテストの発達の側面が表される幹と樹冠の高さの比率(a 値)の計測方法については図1に示す。バウムテストの派遣前後の具体例については、(図2-a, 図2-b, 図3-a, 図3-b)に示す。

面接調査より同行者がとらえた生徒の変化として5つのカテゴリを抽出した(表4)。以下、カテゴリを『 』、サブカテゴリを「 」で示す。

表2. 児童の達成動機の変化

児童	性別	自己充実 達成動機		変化	競争的 達成動機		変化
		前	後		前	後	
A	女	3.1	3.2	↑	3.7	3.2	↓
B	男	3.5	3.8	↑	2.0	2.2	↑
C	男	3.8	3.7	↓	3.7	3.3	↓
D	男	2.7	2.7	→	2.9	2.7	↓
E	男	2.5	2.8	↑	2.0	2.0	→
F	男	3.1	2.6	↓	2.2	1.6	↓
G	女	2.9	3.3	↑	3.0	3.0	→

注) ↑良いと捉えられる変化 →変化なし ↓良いと捉えられない変化

表3. 児童のバウムテストの変化

児童	性別	バウムテスト a値		発達の 変化	バウムテスト 幹の太さ		変化
		前	後		前	後	
A	女	4.0	3.8	↑	6.9	3.8	↑
B	男	1.7	4.7	↓	5.5	2.3	↑
C	男	6.2	3.9	↑	5.0	3.9	↑
D	男	6.1	4.1	↑	5.1	4.4	↑
E	男	16.3	10.6	↑	4.3	6.4	↓
F	男	11.9	—	—	3.9	—	—
G	女	7.3	はみ出し	—	3.1	5.2	↓

注) a値: 樹冠と幹の比率 数字が大きいほど発達の幼い傾向

注) ↑良いと捉えられる変化 →変化なし ↓良いと捉えられない変化

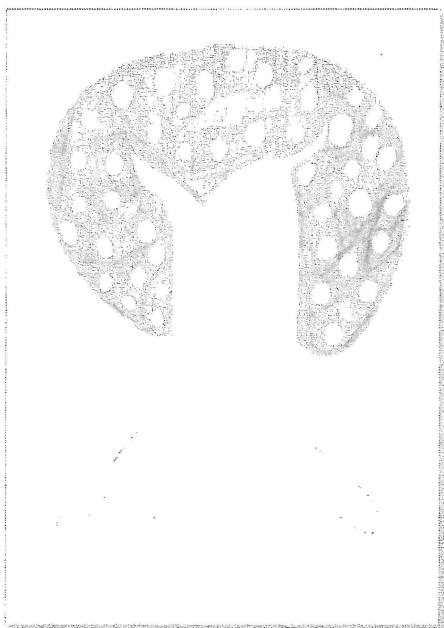


図 2-a 派遣前のバウム

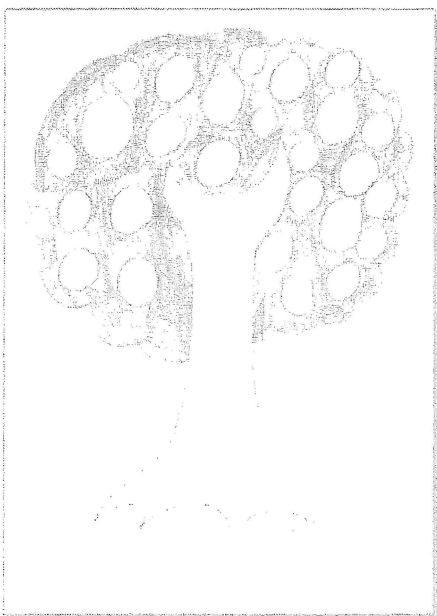


図 2-b 派遣後のバウム



図 3-a 派遣前のバウム

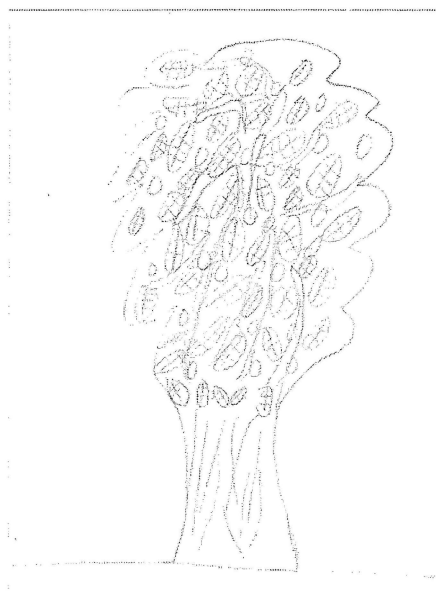


図 3-b 派遣後のバウム

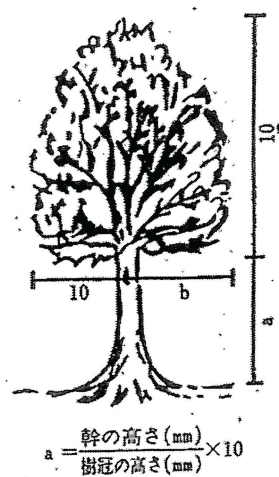


図1 計測方法(山下, 1982)

表4. 生徒の変化

カテゴリ	サブカテゴリ
メンバーとの関係がよかった	友達同士仲良くなっていた 友達のことを気遣うようになった 同行者とのつながりができた 友達に促しの声かけができるようになった
周りがみれるようになった	人数を確認するなど、周りがみれるようになった できている友達のまねをするようになった
反応がよかった	指示がすっとおるようになった 反応がよかった 文字を書く時間が短縮した まとまった字を書く子どもが増えた
自律・自立がすすんだ	自分で決まりを決めていた 自分で服を選んで着る 自分でやらないといけないという意識が働くようになった 食べ過ぎないように自分で気をつけていた 自分でできるようになったと感じていた
自信をもつことができた	英語で話せた自信をもっていた

『メンバーとの関係がよかった』は、「友達同士なかよくなった」「友達のことを気遣うようになった」「同行者とのつながりができた」「友達に促しの声かけができるようになった」から成った。派遣に参加した友達のことを気遣ったり声かけをする、同行スタッフとのつながりができたという変化であり、生徒同士の関係だけでなく、大人との関係もよくなったというメンバーとの関係がよかったことをとらえた内容であった。

『周りがみれるようになった』は、「人数を確認するなど周りがみれるようになった」「できている友達のまねをするようになった」から成る。周囲に関心を向け集合している人の数を確認する、友達のまねをするという、その場の状況をみたうえで生徒自らが行動をおこせるようになった変化をとらえた内容であった。

『反応がよかった』は、「指示がすっとおるようになった」「反応がよかった」「文字を書く時間が短縮した」「まとまった字を書く子どもがふえた」から成った。このカテゴリは、同行者が生徒に伝えたことや求めた内容に対する反応がよかったという変化であった。

『自立心が芽生えた』は、「自分で決まりを決めていた」「自分で服を選んで着る」「自分

でやらないといけないという意識が働くようになった」「食べ過ぎないように自分で気をつけていた」「自分でできるようになったと感じていた」から成った。生徒が自身の行動を自分で決定したり、その決定に基づいて行動している様子をとらえた内容であった。

『自信をもつことができた』は、「英語で話せた自信をもっていた」という変化であり、英語で会話できたことで自信をもつことができていた様子をとらえた内容であった。

2. 同行者の連携

面接調査より、同行者が考える多職種の連携について5つのカテゴリ(表5)を抽出した。

表5. 連携についての考え

カテゴリ	サブカテゴリ
連携には調和が必要	各々の考えのバランスをとっていくのが必要 各々の考えの中間ぐらいでいけたらいい うまくやりくりできた
イレギュラーな事態への備えが必要	イレギュラーな事態への対応が相談できていなかった リスクマネジメントを頭にいれておく 子どもの状態によってサポート体制が変わる
情報の共有が重要	打ち合わせは全員で行う 情報交換の場が必要 情報の共有が必要 情報の取扱いに気をつける 経験や情報を生かす
各々の考えや関わりを尊重する	各々職種に対するプライドがある 各々こうするべきをもっている 教育的内容は教員の指導方法に合わせる 各教員の指導方法は異なると想定しておく

『連携には調和が必要』は、「各々の考えのバランスをとっていくのが必要」「各々の考えの中間ぐらいでいけたらいい」「うまくやりくりできた」から成った。円滑な連携のために多職種をまとめるための方向性やその程度をとらえた内容であった。

『イレギュラーな事態への備えが必要』は、「イレギュラーな事態への対応が相談できていなかった」「リスクマネジメントを頭にいれておく」「子どもの状態によってサポート体制が変わる」から成った。生徒の状態の変化も含め海外派

遣に際して起こる様々な事態に対して各職種の専門性も考慮し備えることの必要性をとらえた内容であった。

『情報の共有が重要』は、「打ち合わせは全員で行う」「情報交換の場が必要」「情報の共有が必要」「情報の取扱いに気をつける」「経験や情報を生かす」から成った。円滑な連携のためには、情報を共有することが必要であり、具体的にそれに関する内容から構成された。

『各々の考えや関わりを尊重する』は、「各々職種に対するプライドがある」「各々こうすべきをもっている」「教育的内容は教員の指導方法に合わせる」「各教員の指導方法は異なると想定しておく」「担当しているスタッフの関わりを尊重する」から成った。多職種の同行者の連携に際し、各々の職種の専門性やそれに基づいた関わり方を尊重するという考えであった。

VI. 考察

1. 生徒の変化について

生徒自身による質問紙の回答について、達成動機のうち自己充實的達成動機は、7名中4名が上昇していた。自己充實的達成動機は、他者・社会にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機であり、同行者がとらえた「自分でできるようになったと感じていた」「英語で話せた自信をもっていた」という自立や自信につながる内面の変化が生徒自身の充實的達成動機の変化につながっていると考えられる。

また、競争的達成動機は、他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機とされる。この動機については、7名中4名で低下していた。この変化については、事前事後の研修期間を含めた約3か月、特に海外派遣中の1週間は共に行動することで生徒同士の関わりが密となるから、同行者がとらえた「友達のことを気遣うようになった」「できている友達のまねをするようになった」というように、身近にいる友達のことを意識する機会が増えたことが要因と推測できる。そのこ

とで他の生徒と自分自身を比較することとなり、負い目を感じる経験をした可能性が考えられ、競争的達成動機の低下につながったと考える。

バウムテストの、自我の強さを表すとされる幹の太さからは、5名中4名に発達的变化としての良い変化が確認できた。学童期、青年期の重要他者は友人や教師、仲間集団とされ(舟島、2011)身近な友達との行動やそこで受ける刺激によって自我の発達が促されると考えられる。この事業への参加にともない、それまでの学校生活では出会うことがなかった生徒や大人との関わりは、『メンバーとの関係がよくなった』『周りがみれるようになった』と同行者がとらえる、身近な人との良い関わり経験であり、この経験が自我の発達の良い変化につながった可能性がある。

さらに、生徒が回答した達成動機の変化については、半数以上の生徒で上昇と低下の双方の変化が確認できた。自分なりの達成動機は上昇したが、他者に勝ち評価される達成動機は低下するという変化であった。個人の障害の特性による変化は特定できないが、生徒は、他の生徒と自分自身を比較し達成動機が上昇、低下する経験をしながらも自分をコントロールできていたと考えられる。

同事業の先行研究(池田ら、2008)において、保護者から見た派遣前後の子どもの行動の変化について、SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire)を用いた結果では、向社会性の得点が減少していた。生徒同士や海外で出会う人、ものとの関わりが生徒の「他者への関心、気遣い、親しみ」を引き出したと考えられ、本研究の達成動機の変化や、自我の変化とも関連するのではないかと考える。さらに、同行者がとらえた生徒の自立や自信につながる変化は、先に報告している保護者から見た TDS (Total Difficulties Score)の減少(池田ら、2008)からいえる支援の必要が少なくなったことと同様の結果ではないかと考えられる。

保護者と離れた海外での生活経験は、これ

から高校生になろうとする時期の生徒たちにとっては、心理的離乳につながる経験となったのではないかと考える。

2. 多職種の連携について

同行者は、多職種の連携には『情報の共有が重要』と考えていた。同行者は、この事業に際して編成されたメンバーであり、生徒とこの事業で初めて出会った同行者も多い。この事業には保護者は同行せず、生徒のことを理解している大人は同行者のみとなる自覚や責任感から、同行者は生徒の障害の内容や状況、事業内容などの把握は不可欠であると認識していたと考えられる。そのうえで、情報の共有は、安全で効果的なプログラムの遂行のために重要となるととらえていたと考える。また、安全なプログラムの遂行のためには、事故や緊急の事態にどのような対応をとることができるかが重要となる。そのため、『イレギュラーな事態への備えが必要』となる。海外では、文化や社会システムが異なること、長距離の移動による身体的な負荷から、事故や体調の変化など想定外の事態に遭遇することが懸念される。このような背景は、国内で実施する事業に比べ同行者の危機管理意識につながり、イレギュラーな事態を想定し備えておくことが重要であるという考えに至ったと考えられる。

プログラムの遂行にともなう連携においては、『各々の考え方や関わりを尊重する』という考えがあった。教育者、医療者、事務職者という多職種による活動のなかで「各々が職種に対するプライドがある」こと「各々がこうするべきをもっている」ことを認め考えや関わりを尊重することは、同行者同士の関係形成にとって重要であると考えられる。特にこの事業のように短期間の連携の場合、同行者のコミュニケーションや関係形成は円滑なプログラムの遂行に大きく影響すると考えられることから、各々がそのことを考慮して活動していたととらえることができる。

さらに、円滑な連携のためには各々が職種の専門性を尊重するだけではなく、『連携には

調和が必要』と考えられていた。調和とは、偏りや矛盾や衝突などがなく、互いがほどよく和合すること(日本国語大辞典、2009)とある。各々の考えのバランスをとっていこうとする同行者や、「各々の考えの中間ぐらいでいけたらいい」という完全を求めず譲ることをふまえた考え、また、やりくりという工夫して都合をつけようという考えが確認できた。円滑な連携のためには、他職種の専門性の尊重に加え、全体の調和が必要と考え、同行者同士の関係や役割の調整が必要という考えとその実践も重要となると考える。

VII. 結論

本研究により、海外派遣に参加した中学3年生の変化としては、達成動機の変化が確認できた。その変化の傾向としては、自己充実達成動機では上昇、競争的達成動機では低下という結果であり、自我の変化も確認できた。その背景には、同行者がとらえた生徒の自立や自信、また他の生徒と自身の比較、メンバーとの関係形成や新たな環境での刺激が影響していると考えられた。

同行者の連携に関しては、情報の共有や他職種の専門性の尊重に加え、同行者の調和が必要という考えも確認できた。さらに、保護者が同行しない海外での活動という背景からイレギュラーな事態への備えが必要という考えも認めることができた。

生徒にとって、保護者と離れ海外という異文化で過ごす経験は、短期間であっても達成動機や自我の変化につながるほどの貴重な体験であった。また、その際の同行者の連携には、他職種の専門性の尊重や調和が基盤となると考えられた。

本研究は、対象者数が限られ限定したデータ収集による結果である限界がある。

謝辞

本研究に協力いただいた、生徒および保護者の皆様、また同行者の皆様、A市海外派遣事業担当者の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

舟島なをみ(2011):看護のための人間発達学.
医学書院.

堀野緑、濱口佳和、宮下一博 編著(2000):
子どものパーソナリティと社会性の発達. 北王
路書房.

池田友美、川上あずさ、中須賀洋子(2008):
海外での社会体験が障害のある子どもや保護
者に与える有用性—第二報子どもの行動の変
化について—,第 55 回日本小児保健学会講
演集,234.

川上あずさ、池田友美、中須賀洋子、牛尾禮子
(2008):海外での社会体験が障害のある子ど
もや保護者に与える有用性—第一報子どもの
海外派遣に対する親の体験—,第 55 回日本小
児保健学会講演集,233.

文部科学省、特別支援教育について:
[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokub
etu/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/001.htm),文部科学省,2017,1,20.

中須賀洋子、池田友美、川上あずさ(2008):海
外での社会体験が障害のある子どもや保護
者に与える有用性—第三報子どものバウムテ
ストの変化について—,第 55 回日本小児保健
学会講演集,234.

日本国語大辞典第二版編集委員会(2009):日
本国語大辞典第二版第九巻. 小学館.

山下真理子(1982):バウムテストの発達的研究
—樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の
描写について. 教育心理学研究,
30(4),287-292